





しんせいのまはら
あまのこゝろのまはら
あまのこゝろのまはら
あまのこゝろのまはら
あまのこゝろのまはら

とぬいしはくみら
かへしはらうまむ
まかえしきか
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ

かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ
かへしはらうまむ

わがまゝのまゝ
とていふは
まゝのまゝ
にまゝのまゝ
にまゝのまゝ
にまゝのまゝ
にまゝのまゝ

四ノ二

まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ
まゝのまゝ

とぬこひぢりのおよ

藤波二位季忠卿

二緑園主人

凡例

- 一 此書ハ一國一覽の物ナリ只京都より伊勢參宮の紀行を委曲せり仍程の里程を記せりとて凡そ順治の公用の地名なりとも連綿を以て教養の益多と厥は又文義の略せぬをありとて一
- 一 官道の外左右に渡と間道の名區ハ大抵一二里三里の程と限りて本文に連續せりハ一の標を以て分てり
- 一 寺社名 名石の古説等の迂怪奇僻を悉く去り實存の紀行にて妄説を以てしと竊願を以て古書印版に載せり怪詭流俗の疾俗或ハ佛説等ハ姑く録し又圖して一頁に納めし物あり
- 一 名不實と昔々愛し事々ハ稍々紛々を去りて其の聲一雜きりの板土佛の參詣記又長明の記を以て照し合せり止り士佛ハ只利義詮々の典藥とて國学の文人より長明ハ順徳院の附の人より加茂宮の氏人法名ハ蓮胤と云
- 一 右道の名不を彰道に混せり一の國ハ今又後ハ其の理を文中に記せり

一 近江國建部明神の造りよりある古道よりゆかぬ名もあらずも少は杜撰記
 一 又あびどをみ給書せり
 一 伊勢彩名不とくありの九十箇所なりこれありなり大中臣定忠の家の都合せの
 書よりたどすれ
 一 名も石の名或は松の名などは其の思戯なりともども是も俗にみまじり出せり
 一 文中に神社式内と記せし延喜式神名帳載るる古社古宮と細記を
 一 神書又五部の手書とある古書ともみまじりも學者の説々區々として思ら
 一 ひきぎぬも多し其の足を引用せど
 一 佛刹の縁記より佛像の出現などは徳と其元と怪しくせんぬも多し其の漁人の
 一 細記よりあべ一等の敷十と七八の除きて記さど
 一 引書に古書の外の勢陽雜記神都考宮川夜活芝の歌尚文中あり附記と
 一 ざぶく一悉く挙るも不遺

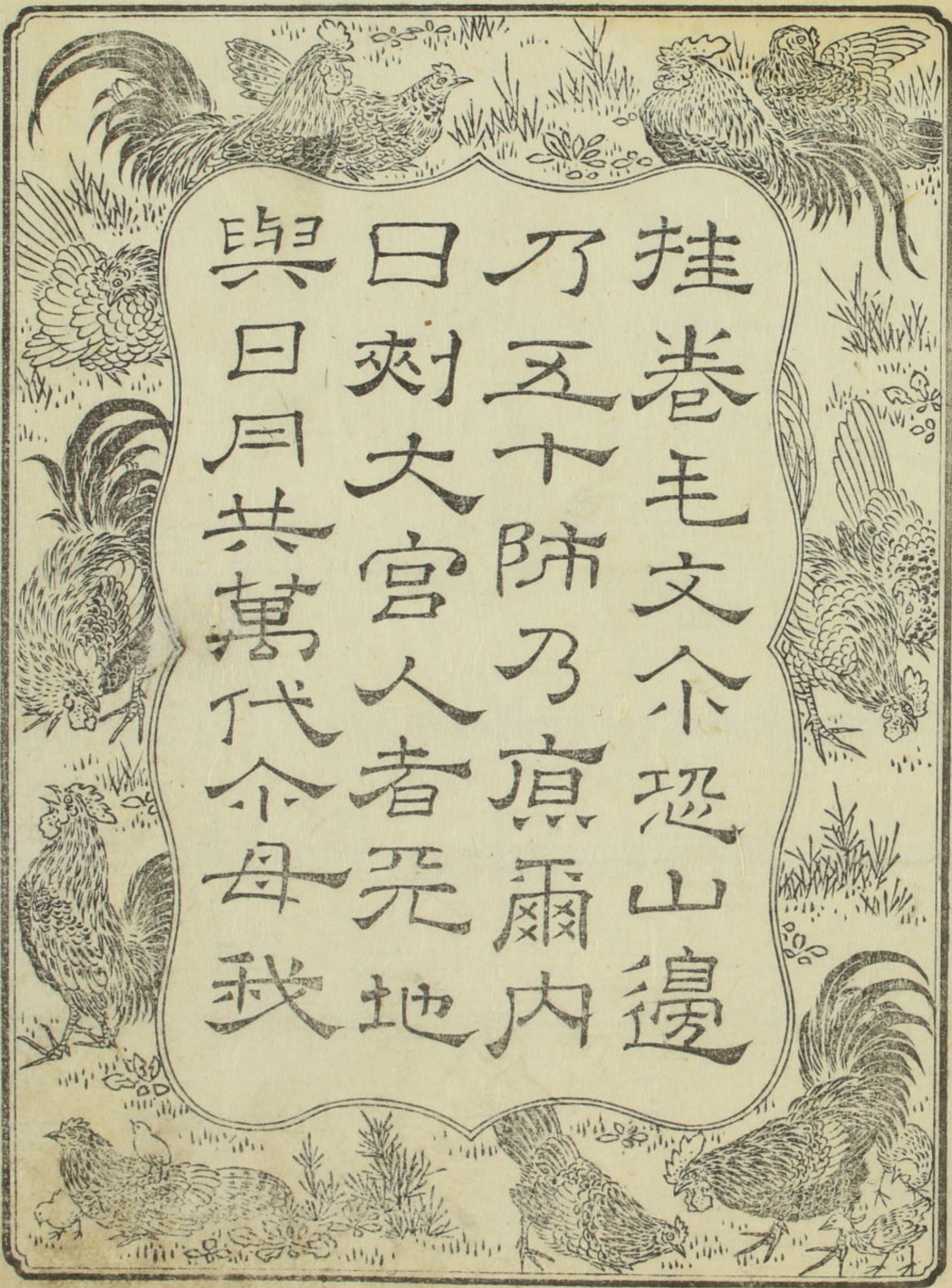
伊勢參宮名所圖會卷之一

目錄

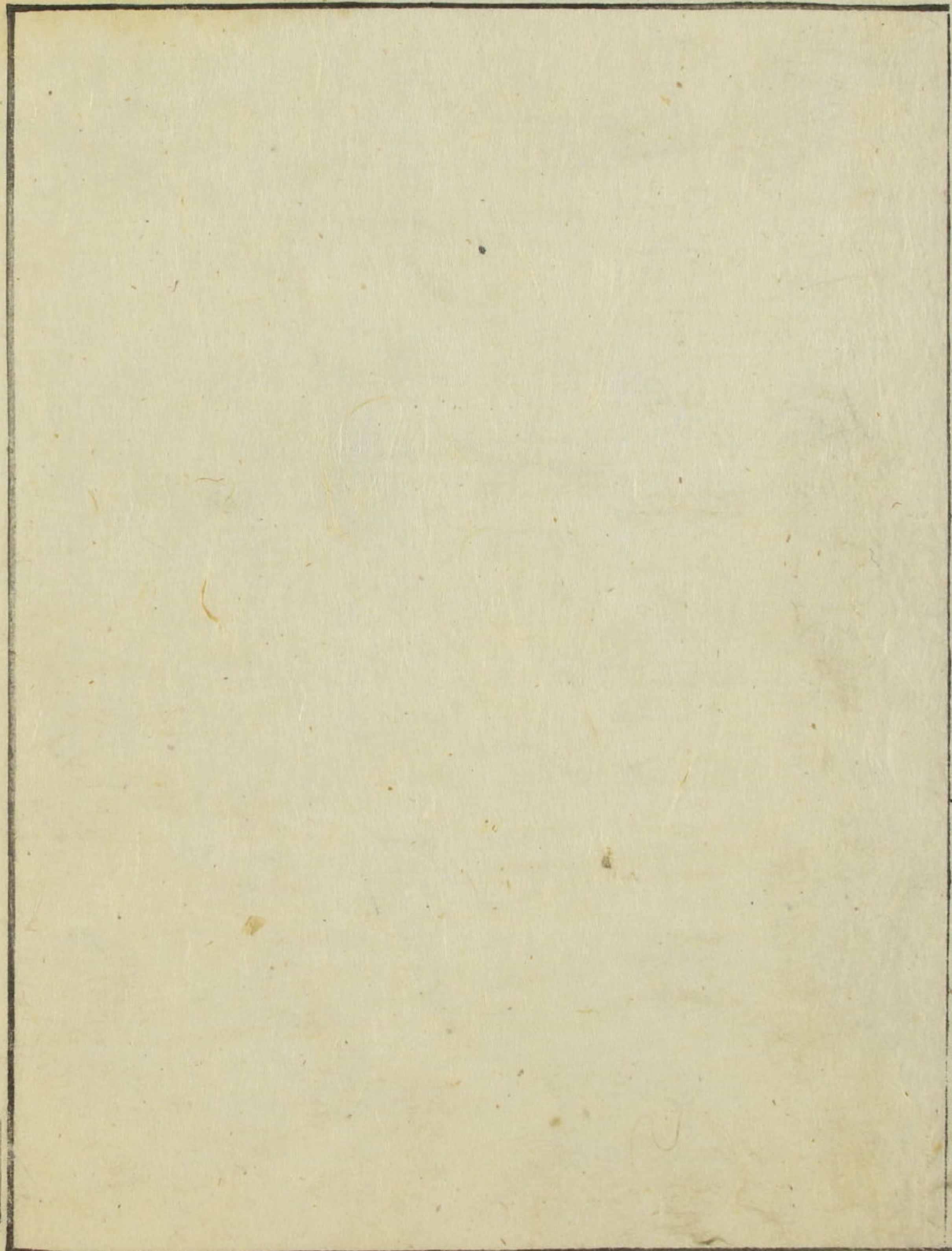
齋宮群約	京三条橋	白川橋	粟田口
粟田口天王祭	青蓮院	門出蛭子	金藏寺
十禪師祠	同辻の故事	牛頭天王祠	首藤刑部墓
佛光寺廟所	阿弥陀堂	定法寺旧地	鍛冶が池
鍛冶が井	定雅山莊旧跡	粟田口園白旧蹟	田村丸別業
菅豊長亭粟田寺粟田口寺旧地	蹴上六軒九軒町	粟田宮旧蹟	比丘尼坂
日山神明	本食上人庵	松坂	粟田山
日岡嶺	海廟野	義經文奉松	山科
天智天皇廟陵	萩の下	鏡山	御陵村
御陵川	人康親王旧蹟	明王寺	安祥寺
護國講寺		毘沙門堂	奴茶屋

諸羽明神	十禅寺	巡地蔵	四宮川
袖川原	どうろ茶屋	小園城	追分
走井	兩國寺	逢坂山	逢坂園田蹟
近江國滋賀郡	輝丸祠	園守神	駒迎
園清水	園小川	立園親音	園清水輝丸宮
逢坂ゆはげ	園大明神輝丸	牛の塔	近松御坊
園寺	長安寺	小町庵	城跡
大津里	八丁れの辻	同祭礼引山	松幸村蹴鞠社
打出淡	四宮明神	石場希松迎	義仲寺
同精神故事	りろこ川	同塚	この川馬場村別保
義仲塚	芭蕉堂	八大龍王社	八大龍神社
膳所熱門	天満宮	信膳の湊	粟津原希合戦
膳所城 希去橋舟	膳所の猿		

兼平寺	田畠社	精舎の池	兜塚
八幡社	五百羅漢	守子川	兼平塚
鳥井川御霊社	芭蕉幻住庵回點	何々の薬師	夢の渡橋
榎谷堂希瀧	石山寺 希祖師法堂	源氏の間七輪	紫式部石塔
源頼朝石塔	同乳母亀谷石塔	行履園	龍定池
曆海屋掛石	悪源吉義平塚		



挂卷毛文介恐山邊
乃五十疋乃原爾內
曰刺大宮人者禿地
與日月共萬代介母我



尚幸実と
下の齋宮村
の案に委曲
の記せり



齋宮群約

昔大津宮の御杖
の代として内親王
を齋宮に之せ
給ふは三多の
間内裏及び
時宮
被授
て都
伊勢
を齋宮
群約と云ふ
是其國之
あり此書
の記
と





△おれより科まをり都所又譲りて定まらるるを看く
其のぶくとられ△を以て所と成る國も略と無淺なる補ふ

京三條橋

左衛門秀吉公増田長盛又奉約せり此橋も石也東海
道五十三驛これよりとて橋の前後旅館まゝ一橋も石柱の遺蹟

とと長サ三十七丈餘極實珠又銘あり 増田の三奉約の一人あり四條五條の
格のゆゑを詳記はらん

附言 京三條橋の對面義仲白川の末流に引多分義経重忠川形の隈より出
本増と名をり川を隔て謝合より一が津曾を僅に二三騎留りて其の隈より出
小増と名をり三條小川へ引退く石中三條の隈より出
心の勢を破り木曾と名をり一が津曾を僅に二三騎留りて其の隈より出
遠くありの末流あり

檀王法林寺△

白川橋は川より白川村を南へ斜に今の南禅寺まで流をまより西へ
まよりして加茂川入今の檀王其所の落合にして今檀王の裏に中
一間餘の堀のおくあるあり是元白川筋の跡なり今の白川橋の
を町餘西の方に交流あり南よ交流より川筋の足と小川と
上流の小川 今の知恩院町を迂迴り大和橋の下へ流る流は平教
とい別あり

盛御小川の山莊といひ一知恩院町の東にありしらん。本曾殿三

条小川は退くとらぬ此小川もて今古川町と名不其あとなりそ乃
形のりて溝の大なる流あり

栗田 此邊りの地名より一上栗田 栗田口の栗田の口とらふなり
下栗田といふ今所三十三なり

青蓮院 京極大阿闍梨實公の御子行玄大僧正用基也當院筆道
の免許あり是を本道といふ筆法に尊圓親王を御祖として御代々
書詔相續ひく高逸は御書風を御家流と稱と

門出蛭子神明社 舊地の聖護院の本林の小あり空の上の後三條通栗
田領にうはし其後青蓮院御境内庚申堂の傍に後と

金藏寺末地藏。庚申堂。大師堂。辨財天。尊勝院

十禪師の神祠 青蓮院境内あり 百練抄に青蓮院
管内ありと云 古書に十禪師の過

栗田 此邊りの地名より一上栗田 栗田口の栗田の口とらふなり
下栗田といふ今所三十三なり

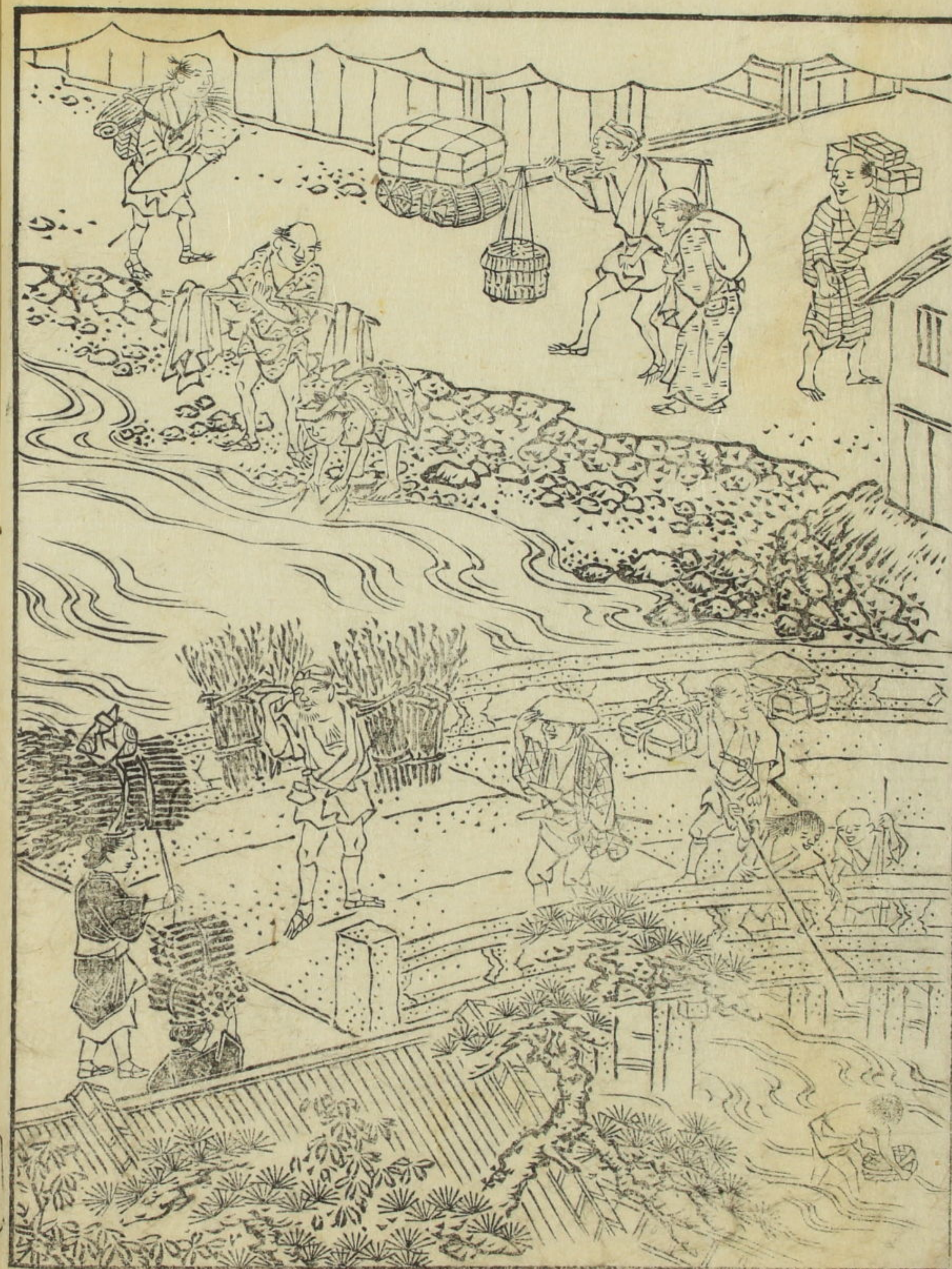
青蓮院 京極大阿闍梨實公の御子行玄大僧正用基也當院筆道
の免許あり是を本道といふ筆法に尊圓親王を御祖として御代々
書詔相續ひく高逸は御書風を御家流と稱と

門出蛭子神明社 舊地の聖護院の本林の小あり空の上の後三條通栗
田領にうはし其後青蓮院御境内庚申堂の傍に後と

金藏寺末地藏。庚申堂。大師堂。辨財天。尊勝院

十禪師の神祠 青蓮院境内あり 百練抄に青蓮院
管内ありと云 古書に十禪師の過

白川橋



栗田口天王祭

毎歳九月十五日昼後二夜
の渡御あり神輿あり
此の神を祀りて賑わなる其
余氏の所より神輿多持
連て渡り其飾りあり
て美藤
あり



登り栗田

白川橋と號て
水際を智恩
院と云ふの一ツ
橋とあり此橋
の上にて神の
曲拵工妙と云ふ
其路瓜と云ふ
榛抄びと云ふ
きり國の如く
夜寅の刻あり



又御茶とらふあり是れ今の黒谷乃の廣道
十禪師の過とつひ一なる
義經記に金商吉次牛若丸奥易(具)なる付の文に明日若日あてひりあのおくくの門出仕り
せんどもとち多きいさうの栗田口十禪寺の茶とて坊にぞととのいふいふれいと師の言まじ
の言にまじり義經記の書換へる一又著同集一条院の御とれ勢所十禪師の過まじ
とのいふあり其ことわり國上よあるに此茶ととも十禪師を栗田口かりりしを十禪
師の過とて御茶とらふこととつひ一なるを二基の社地とてありしを後青蓮院經宮の社地
内よこもらせりたるなり

牛頭天王社 青蓮院の東にあり東陽坊忠乃勸請にして元弘己未
回祿の後足利義尹の産土かりりとて明應九年卜部兼俱に命じ
再び勸請めて感神院新宮の額あり則栗田口の惣社也
天皇三不、一栗田口盧御又祭多不の吉田村あり西天皇と稱を聖廣院村と共よありつり是法村
あり東天皇と稱と

惡源右義平が忠臣十六騎の一人山内首尾刑部俊通が墓
佛光寺廟所
阿弥陀堂 服檀親鸞上人植髮のる像を安置と
定法寺田地 堀地御坊と号と宣胤卿の記にも見へり地名今存と

鍛冶が池 良恩子の傍にあり今其教と名あり ○鍛冶が井 青蓮院内大谷氏 今鍛冶の名は栗田
は物とつひく昔其鍛冶の上も多く住たりをかりり我中若三又隅や
久國若四郎其名天下又聞ゆ後鳥羽院鍛冶を好むゆひて院中よ
震治ありしとれ久國を師範と名する是番鍛冶の始りて鍛冶の
系圖に新御所とらふ此院の御事に御製衣の叙よ十七の菊と銘
しゆり能狂言の栗田口若馬之丞と久國のゆかり 鍛冶が池井とも
は小鍛冶宗道が古歌とつるの誤かり

右大臣若原定推之山莊旧蹟 栗田村にあり和名は 栗田口関白山莊旧蹟 日不末
二條殿と号と拾 田村丸の別業 日本後記 菅豊長亭 空花集 栗田寺
送集序の推考

栗田宮舊跡 栗田院ともいふ栗田村の北地名は圓覺寺とらふ
あり即これ清和離宮の田地也 三代實録云元亨三年五月四日 右上天皇法和院を
移し道場として額を圓覺と書し移り

所名

栗田口十禅師
 過の故ゆ

著聞集云
 一條院の密府秘蔵
 の傳あり多ゆんく
 とうひんれもなて
 名いなりたれを
 獲た栗田口十
 禅師の辻條
 といふ世自ら
 人の云ふを
 疑ふて人を
 解られり多
 にひされ下
 又編笠を
 るより人馬か
 をりて此條とて
 玄舟を造りて
 名いなりといひて



者あり初此人とて
 名いせりるに密府の池
 に魚集り浮
 ひりりる魚
 ち母りはれハ
 あいせて大
 鯉をみり
 多るまか
 五りりる
 帝其左
 と同せれ
 まい言曰
 此魚も
 ことこの後の
 帝之父母の
 子として後
 養を侍り
 世に威ありて後
 園の田園を賜り
 松接を執りたり





いのでがまげ
日園嶺

續古今

たし鷹の

ま乃

まれ系

狩くま

入日の

園み

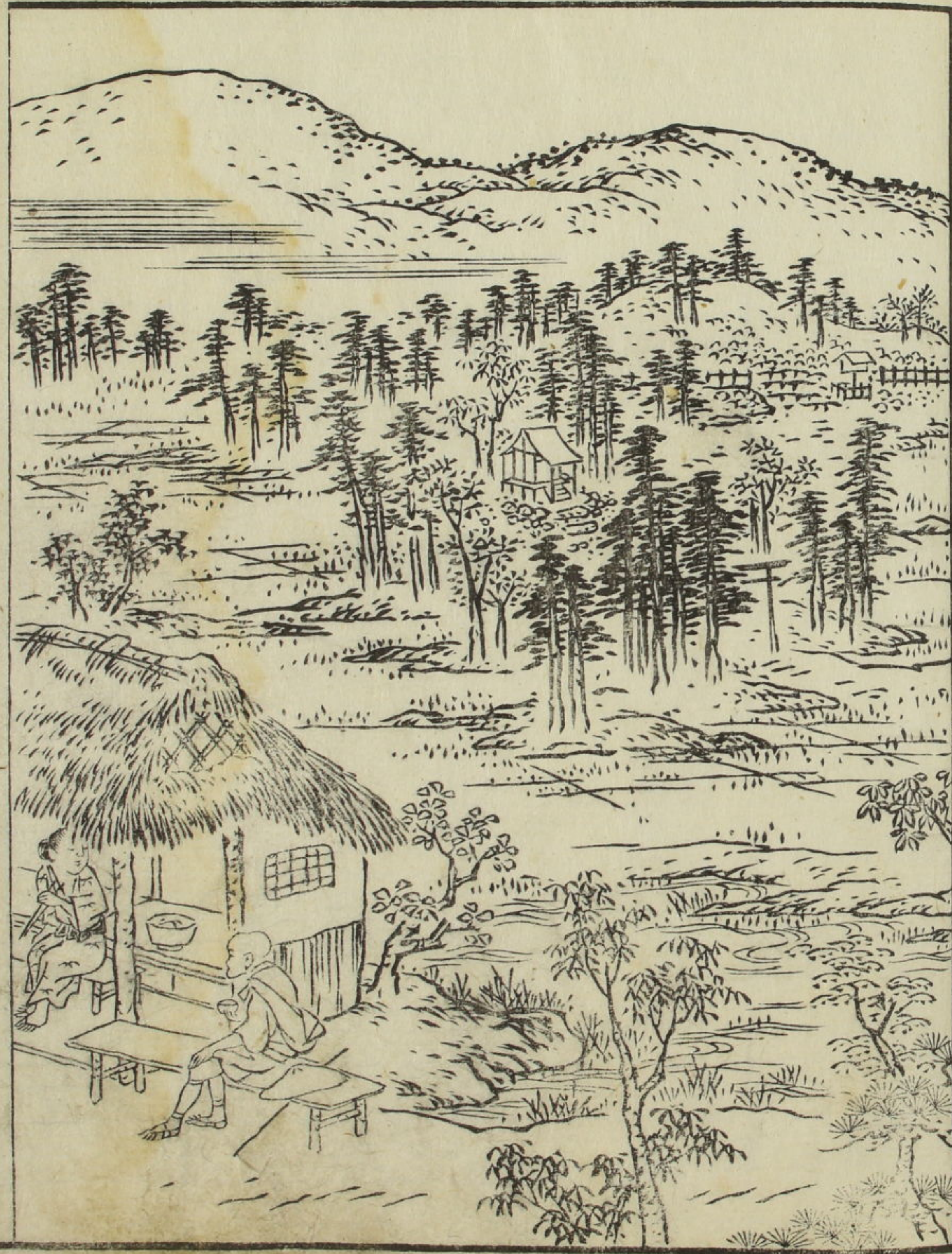
まもと

な

あり

土御門院





天智天皇廟陵
即中廟也

新抄

山科の書羽の川乃さよまき及びぬはら書成のこころ

権納言公雄

山人の心をゆりし山科のこころ此里の秋れ文書

和泉式部

零して熟なる山科のこころ此里の秋のゆき書

家隆

天智天皇御廟 遠くを御廟野とて街道より三町斗り在へる本林に小

北阿

祠を居皆落し石の水鏡とて三月三日帝御馬あつて山科(おいて林の中)を

移ひぬぐよおしまはるる山科の落しとて漢のまなり

月近江の宮は崩れしとて山科の宮に今山科の宮とて山科の宮とて山科の宮とて

日本十陵の第一は山科の宮に在り延喜式諸陵寮近江大津宮

御宇天智天皇在山城國宇治郡兆城東西十四町南北十四町陵戸六畑

山城志云陵戸六畑の内今一畝ありて嘉曆建武と東の捕任標教多く花もあつて山科の宮とて

延喜式中勢道花菜後凡十二月奉諸陵幣其儀三議已上及水邊三後大政官定之とて幣

一万系集天皇聖躬不豫時太后奉御教一首

玉の系よりとけしれい大王のゆかりのらひなくてされ

山科の宮は崩れしとて山科の宮に今山科の宮とて山科の宮とて山科の宮とて

鏡山 陵村の西水あり 明王寺の後の山 御廟にほきさるる山なり

万葉集従山科御陵退散之時作歌 長歌

八ととて我大君のかゝとて山科の宮とて山科の宮とて山科の宮とて

此多にゆりし御廟を鏡山ありとて山科

所名 御陵村 御陵川 菟の下村 明王寺 御廟 山科宮人康親王舊山科

了光山護國講寺 日蓮宗山科の標本也

山科宮人康親王舊山科 地名ありしなり 仁明天皇御宇にのらひし此なり

所名 山科宮人康親王舊山科 地名ありしなり 仁明天皇御宇にのらひし此なり

三代実録貞観元年五月七日山科入るるに云 伊勢池邊に禪師の御子とて山科

安祥寺

伊勢物語
 田村の帝と
 中とまのいとわい
 まーくる其時の女
 御たつきこや
 こまそくろくろを
 身移ひく安祥寺
 にてみまさくろくろ
 さげもの奉まろ
 けてまろりあはれ
 ものま捧げむろ
 わりそこぞくろ
 さげものを本
 の枝又付て堂
 け着ま立これ
 がらもさらり



堂のまみ
 動き出る
 中とまろん
 足んろ中
 くのままごと
 題めくまのま
 ある秋奉らせあ
 右のむまの
 かつろろおき
 ぬめたがひ
 ぐろろろ
 ぶのま
 うろろ
 あろ
 表のま
 ちろ



右田村帝の文徳天皇の
 むまのまとい葉平のま

四の宮村
四の宮川
巡地蔵

糸を
やぶ入乃
あふみの

君や
そで
へん



親王の御之其御中... 御のくまの子星の涙あり... 面をきりてまらさうき中居あとき
こけをきりてまらさうき中居あとき

あつひも... 心をせんうけあされり
後撰 三條右大臣

毘沙門堂 門庭 △ 奴茶屋 △

諸羽明神 △ 四宮明神 △ 西宮の類... 西宮の氏神... 西宮の氏神... 西宮の氏神...

十禅寺 △ 西宮の西... 西宮の西... 西宮の西... 西宮の西...

巡地藏堂 △ 六角堂路傍にあり 俗に六角堂と云ふ

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建... 西光法師の建...

所名

四宮川 △ 西宮川 △ 西宮川 △ 西宮川 △

今新... 今新... 今新... 今新...

今新... 今新... 今新... 今新...

又此の川... 又此の川... 又此の川... 又此の川...

都をはけ... 都をはけ... 都をはけ... 都をはけ...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...

附言... 附言... 附言... 附言...



此の町は國
 守り素の人
 宇治より見
 糸への別はる
 あり道はる
 是より熱名紙を
 坂とも又大津とも
 又、札幌の傍り
 柳緑花紅の標
 石あり是に添ふ
 今文
 六地勢 後ろ過
 とろろよ標頭なく
 して文むりあり
 この道より大津宛あり
 岡つぎきちり針 算盤
 大津強文との店多し



大津
 退分

走井



此餘や
のをい着
某乃
抱好
てを
造徳と
云書
出て景
中合志と
云神と称
せり但今
氣公飛三
茶山津浪
あく其名
たるり

山竹の亭

世系



藤山
去流を
て今のハ
其形をう
はせしと云
高本
其余風もつん
うり藤山の上
に小亭あり是を
ふりけの亭といふ
内は小野小町百歳
の像として祭壇あり
おろろ光の像あり
石の高き不
小堂あり毎
葉原といふ
石佛あり



逢坂山

一名子向山

手向といひく徑者
旅行人を導く
其手向といひ
山又のなる
都より出て
其手向といひ
山又のなる
必此不ふ
白向山の名も



ありありと
ゲとふも
轉語あり
説

後撰集 卷四

名子 押

あふ坂

やま

はね

人

あふ坂

あふ坂の秋敷
あふ坂の秋敷



所名

園清水

今八町の輝丸の社内みあれども長明寺名抄みその時

既水よりより一尺くれば今さうにさきともやむとされども前

明神宗の町を園寺清水町とて此造りとは元へり

所名

園の小川

又園川といふ

事故

園守神

祓て後地抄りひるあふ坂の園守神やゆるささるらん

此らよばふよりちりて古説も多し。園屋の路に此のよにありしとも又大津の市中

にあし。もつひと未詳。若の園にあらば園境に盡くると園守園津といふ

源氏園屋巻に。園守のさきよりやまうくちかす。うまうまありとついでに文の記

みて此園守といひ。も輝丸の妻。若陸を密の園守にたらしめし。うまうまを

この附も園守といふ。うまうまを密の園守にたらしめし。うまうまを

若陸の常陸より海より源氏石と諸のまらにて

此説よりよばる。本説に。若園とより涌出する。うまうまを

拾遺抄延喜の御厨月冷の所。若園は。若の集より八月約運と出流より

遠坂此園の清水も新記より。今やいくらん。是月の約。貫之

君が代よあふ坂と此若清水のさきよりとあひけられぬ。忠岑

此説よりよばる。本説に。若園とより涌出する。うまうまを

拾遺抄延喜の御厨月冷の所。若園は。若の集より八月約運と出流より

遠坂此園の清水も新記より。今やいくらん。是月の約。貫之

君が代よあふ坂と此若清水のさきよりとあひけられぬ。忠岑

此説よりよばる。本説に。若園とより涌出する。うまうまを

拾遺抄延喜の御厨月冷の所。若園は。若の集より八月約運と出流より

今山よ輝丸宮二座東西みあり

祓といふ輝丸と名付し。いと素のあひる。上上下下にありし。市

秀吉連説の抄書より。久しう昔園不。に神祠を置り。市且市

姫の神。檜且橋姫の神を奉る。かお。東盤笏八。誠の白川園

の明神。奉幣とも。園守神。て今も園守明神とて。あり。うまうま

小田原陣中。秀吉。武田。系氏。政を奉る。御大津上の園の明神。て天下。抄書

連歩百額。ありて。天正十八年六月十八日。地主人。渡部。輝正。少弼。長政

改め。うまうま。む。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま。うまうま

事故

駒迎

約牽。ひう。毎季八月十日。諸國の御牧の。を天子へ貢

奉るとしてあふ坂の園と。来り。た馬寮。右馬寮の官人。此。み。む。て



関大明神
輝丸宮

事故

牽をりてこれをを坂の約迎とて
牽をり十七日と甲斐越後廿日武蔵小郡廿三日信濃登月廿八日上野へ尚園上又江と
 遠坂のゆつつけを

あまをゆつつけをよつとて表ゆきをましくも
ゆつつけるといふの中さへがき付に境のなまやけをせ給ふと給ふゆきつけに方
 の園よりいりておろす遠坂とて一方の園をまばやくより又
 大和油
 たがみそはゆつつけをよつとて衣をよつとてゆつつけをよつとて
龍田と大和界の園なりとまを遠坂とてゆつつけをよつとてゆつつけをよつとてゆつつけをよつとて
 南の砂田(西の穴生なり)

関大明神輝丸宮
此丸のたひに端とて一此の中の所より八丁の間に関清有明神とて
 あり九月日又此社へ還れあり是神よりゆつつけをよつとてゆつつけをよつとてゆつつけをよつとて
 三聞観音 此内へ蓮如上人の名号なり庵は善光院及の款あり輝丸の隠居をまを
 関清有輝丸宮 此宮の園有明神とて今も三好寺別所の内近松寺中とて

祭禮の日輝丸蜀紅錦の御衣月く不持の長刀金杖表槌刀是等を
拜殿の柱と表して云 関清水輝丸宮醍醐天皇弟四皇子日本國中説經讚語
 勸化師者曲藝者等祖神也右等之者之免狀當本社 出之也 関清水涌出
 源在本社拜殿之前 小野小町姿見石在本社左
 小町庵室在本社少北西云

逢坂駒迎

拾遺
あふさのこまゆりへ
あふさの丸園の逢坂

うげんえん
ひくろん
聖月の駒貫

逢坂のせいの
あふさ

ふたつと

らふらふ

もれぬ

大田

公事根源

夕の信濃の初音

牧の馬奉吉十

正勅音の牧並也

月と十音にて

作りしとも茶雀



院の御園忌

あふさのよひて十

六日

南殿は出御

を御後を

文書

早て

をたまり

つるを

みと

取の

野

次

東宮

ま







関寺小町

関寺小町の秘を教樂秘中の
 秘みけして其人の
 あらざればなること
 ようく道に雲
 上礼舞會宴
 にもつて
 幸はし

園奇 牛佛

榮花物語卷の月の巻の壽二多五月
 日 湖に舟の盛儀のある園奇と云
 石に牛佛のつれあるひてその人の
 縁り見なる年ごろ此寺に文ある所
 堂を建給動を催うと云なりけるふ
 えもいそめ大木にも唯け牛一ツと
 えこひつるのそを中略寺にお
 うりに住む人此米かりての目
 我らうておさうたる夜のま
 を他聖堂を建させんといふ年
 ごろとるふそあれは人のい
 うはくふたといふなり中略
 つるが縁ともゆさるるひもち
 まの牛の心さぬにもゆさるる
 入る處をこめなるて世の中
 よおのりたる人系れぬは
 く中略唯帝東宮宮々ぞ
 兄おのりたる人系れぬは
 牛佛を中略聖縁
 像を画んとして急ぎ



中略つる人にも
 縁りこむ人もあり
 園 牛の縁
 うけらるる
 又よき縁
 あんころ
 の園

人あまのぼゆれど
 日しるるれがど月
 此形と画せく六月
 二月を所取入ん
 多の縁其の目ありて
 此御堂とい牛三まひ
 めぐりありきそのの
 不にゆりきてやぐ
 記たり中略とるふ
 其のよぶつて縁
 松樹一たり後画
 形の内にも宮は拜
 縁ひるるそあがれ
 かせう月と日とを
 縁ひるる





大津^{おおつ}八丁^{やち}
 札^{さし}之^の辻^{つじ}

其角

夕^{ゆふ}觀^の馬^ま

セ^せー^いヤ^や

と^とれ^れ著^{しよ}

大津
四の宮祭列山

九月九日十日

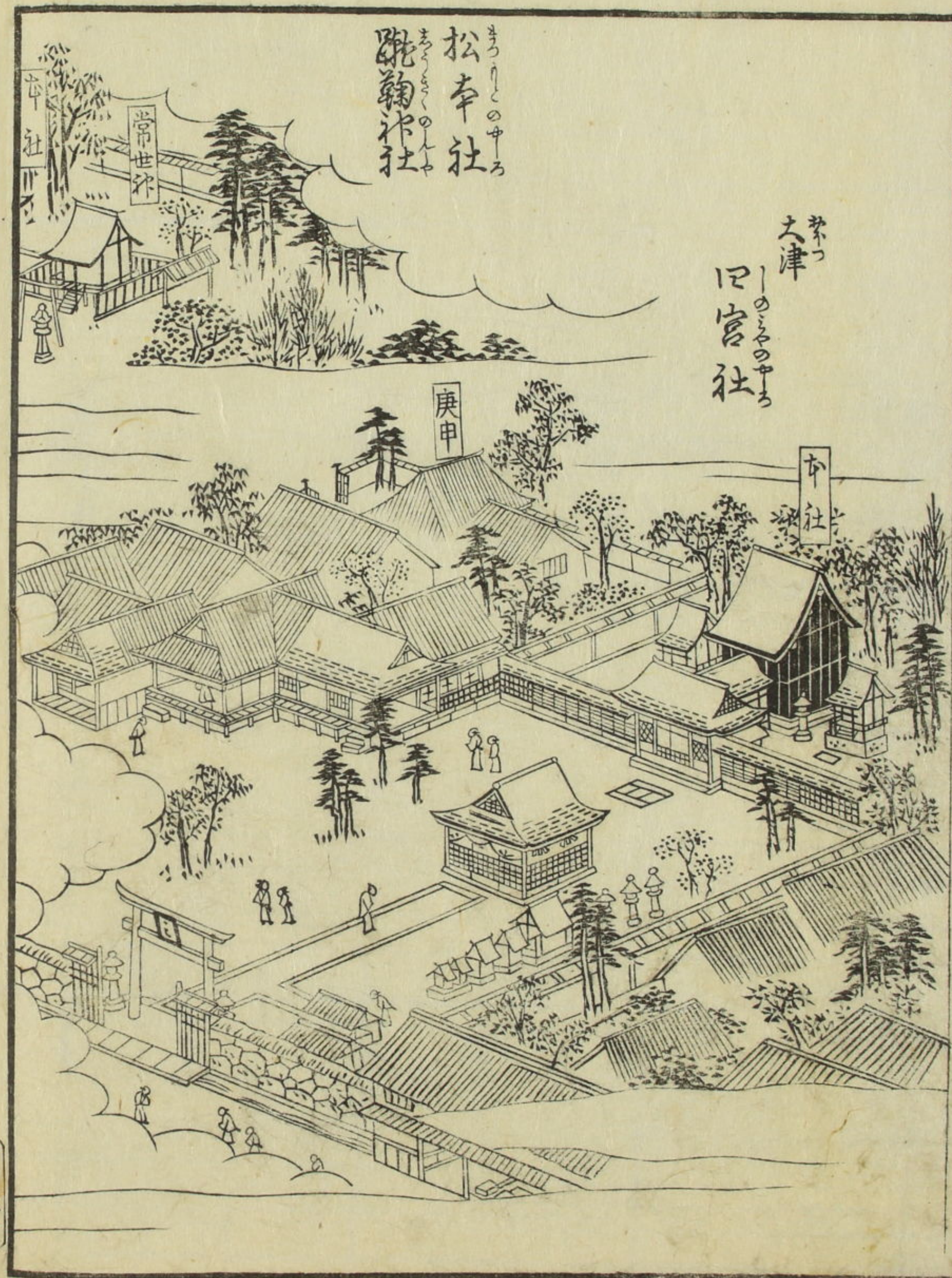
西の宮 源氏山中
折水山 西豆母
龍門 神樂
石橋 狸
西の宮 湯立
神功皇后 月宮殿
郭巨 都合十四番
二節 幕を張て
巧 細



送花物行い物

送花物 八幡 道祖神 御供
九月七日 山飾
九月十六日 御輿洗





雲谷山奉新法日方のむ先が香

竺一檢校

其後山科真影堂成軌してうけ奉らんをせし三井寺乃
衆徒是を拒んで真教を帰さざらんゆひく上人等宗の清
教を写して教像み久終みと稱し移す於此後山科焼之
てより教像成りていふ今京西本願寺の尊影之
中水車のうへへ六束とてあるも日影の肉かりとて後の名号ハ

所名

大津里 淡海志み町敷九十八町人家四千餘軒四道の襟喉して
人馬牛車を以て洛中へ運送するも不絶馬を大津馬とて致
にもより各遠坂と成誠行往らう車のかうもよく
かりつづけたりと 舉白集にも書たり

関之えく著るはゆる大津馬のをりつとる急く之 為家

秋の日もなうこれの紅葉はく大津の里此かきりたり 降祐

大津の名は天智天皇の都よりつひにせり是を津津ともつり此里は坂本之概
此地へ引けしとれ町名も若くは若くあり町の名は坂本と同名あり

所名

乳過 系町 城趾 今官廳のわたり 石壘水中に流るる大岡の時代

出淡 これを打出の淡とて相坂と成誠く湖も始めて是ゆるを

つととぞ 回子の峰は打出とこれの白妙のふたりのふと縁とるは是也 平家物語

右のふたつは通る松本の淡辺へもはるは是と打出の淡とてハ

あふ坂をうらむこれに近江の海をゆへる浪まざる 淡人不知

あふむかろあふれ淡のうらむとてやせま一人の心を 淡人不知

四宮明神 其地の遠りと 祭神未詳 名居の額み天孫身に宮とあり

名目抄云を法判刻とて非社後後社社終社とて書はに宮は日吉の排殿とてハ此なり

賢本殿とてハ被安んづる終えては宮の神官總政への職に於る中お侍の式式終てより

賢本とては宮の社中にも安んづるををいひては宮は日吉の賢本殿とてハ此なり

松本村松本社 蹴鞠の神 西原後田彦を神 大古と城岡桂宮も在て後

羽院上皇鞠伎をこの神も神甲斐の養元のそと先勅して此松本

園に遷座ありしを兵史の後今の地へ遷しなる 即飛をの神

波の志家より

蹴鞠精神

若問集

侍従大納言成道の卿
蹴鞠の心は心ざし深く
古今の妙はよてぞおかし
まゝなる或夜棚に置
不の鞠をばまろび落
来りぬとぞ不程に顔
人して手足身の猿み
はく三田文の小児をど
かる者三人もつ
鞠のたまもどつた
さるあり何者ぞ
と向流ひるれが
我の鞠の性
昔よりかをど
又鞠をばせ
強人いささ
おしままふ



アべきのありて
録りしうとく
眉よかてさる
髪とやとさ
まご人顔
春陽花
の字あり
又一人を
夏安林又一人を
秋園の字ありて
合らるる君御鞠好ま
給ふ代に園家一官増
命さる後あらん御鞠
の時のくくを松の
本づつひま集りて宮づえ
仕り御守りともかまらせん
とまわると其家のかんぞ
かろうれされが鞠を交る
ことば蹴鞠が鞠の流と





石場

旅より帰
 る人と迎へ
 て其を酒
 を今酒迎
 といつても
 り右より
 まを出て
 りるれば
 とはつて
 又玄日
 皇居紀
 壽千太
 按るホ
 て酒祝
 宅と居
 是は酒
 さるる



義仲の横道をなして龍野義経の墓をおとすて龍野の義経の墓をなす龍野の義経の墓をなす龍野の義経の墓をなす

○芭蕉塚并に祠堂 本像の當附其角去来をけり免に方の

門人足を嘗む其後天明年中翁八十回の附を以て系圖繪撰夢

又改建る祠堂の内み人形三十六人を画き各發白を書て堂内小

掛於翁の御清一家の祖なり俗姓松尾氏名宗房忠孝と稱せり

多に月嗣子死去と翁其死をうらみ我世思ふるにきおみあひたりて

芭蕉野分して盟と雨をさきく疾うな

苑の雲種と上野うほさくさう

と眼系の実系をのべり深川ありてのゆきまれよりあこころ

隠さうのうらみを竹斎よりみたり

と風の吟めは化して風の師と伝を傳其後らじうを地裏へ送りたれ

病丁おかしうかりてさし保り那

其年より大津船不の人のつらき

てはより多あり元來混雑寺佛頂和尚み嗣法してひかり用禪の法師と

いそれ須廣の夜泊家深の住居とさゆらうの庵も住つてゆき

なとつひく妙來の形も十餘年の同林とせし

其後停架の故郷又庵をかまへ三月月の死ありて浪花を来りて種なく病み

ふれ門人のみり發をへさる命運を初死後の安へたれ

族み病んで愛も枯野孤うけまをた

いよし一節きやまひとらまは其角を来を

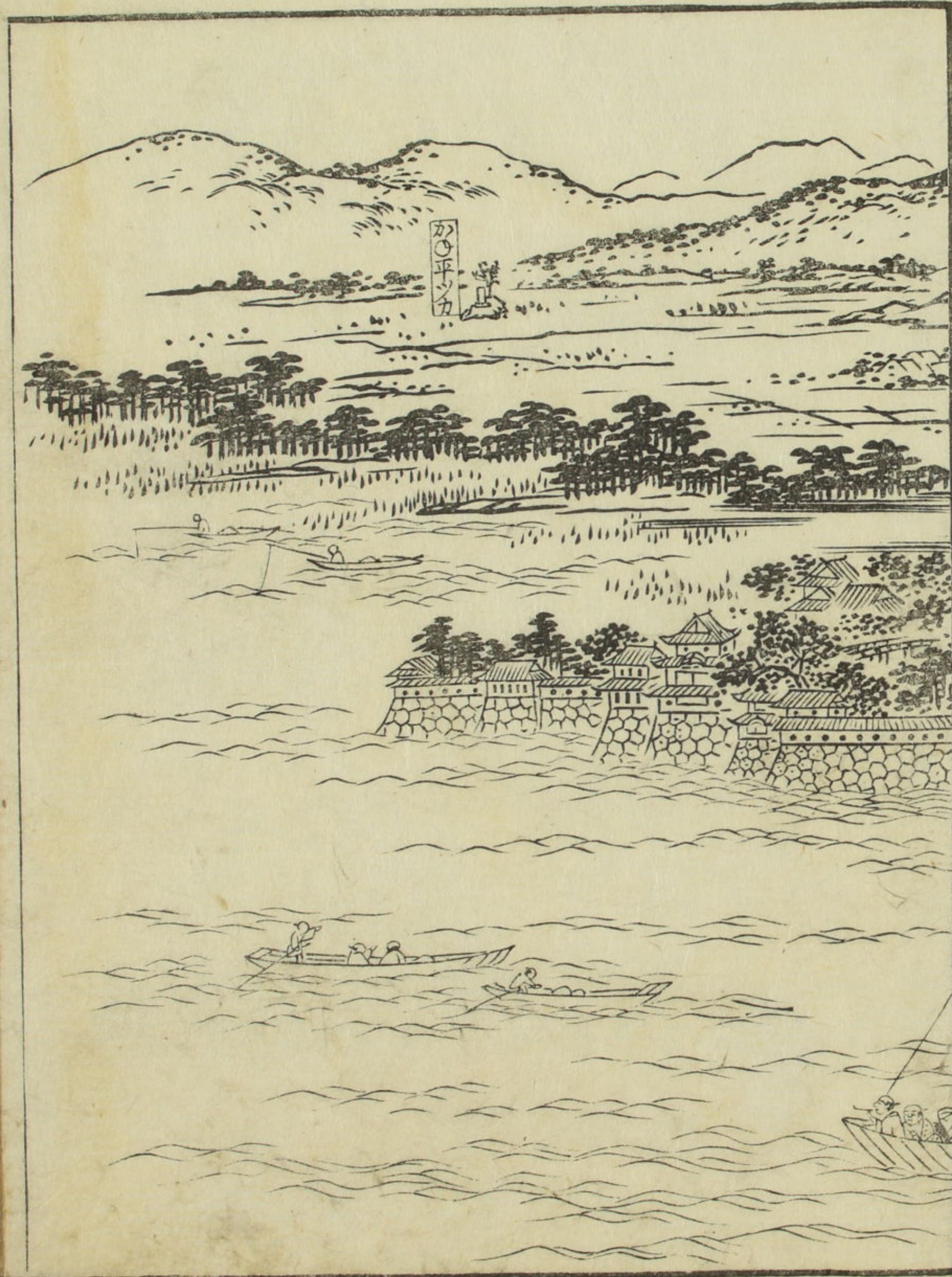
本曾殿と資中合せの巻とさう那

右の晋子の松尾をなすねをそこまらと採りて其大むと記し

この川○馬場村○別保 國分寺本末 ○膳所熱門

天満宮 此傍に北多新以來東武醫官吉田桃源院法印常

八龍王社 八の宮とのふれ花九月朔日 ○八龍神社



其二

山王祭の時

供御の料

として膳所の

所にく七日

前より

一場

を

か

ま

へ

ま



人よさ

せんを

乞ふ

法にこれと
膳所の後と
云



所名

膳所 膳所はより日吉山王祭の神供を共と成る膳所と云 大御記
膳所記又世にもありて此地に粟藜を産する。膳所の熾元は東及井にあり
て信長公膳智日向ち粟藜を寄りて大御の神代大津に橋を築き高
次を寄る其後戸田某此地より門を築くといふ
おもひの濱 膳所の古名ありて字を不倍膳の
濱と書す

兼盛

所名

膳所大明神 所祭大梵天 熾の大神ありて三月三日節よりこれを粟津に寄る
粟津原 粟津原粟津原 今膳所の地にて膳所大明神に即其社の神なり
後拾遺

権僧都諱園

兼平寺 兼平寺と記せり 兼平寺も日時寺と建す
粟津山王祠 粟津山王祠の宮ありて 川原の邊にあり 奉縁未詳一説は田畠某又か
るふ娘とて入嫁ありて頼朝の感状をたげ終り此地にありて 左膳の
是よりたてしめりといふは 今け祠を山王神との神供炊屋と云ふに似
たり尚兼平寺といふ
○かげらうね池 社の名 兼平寺の境内にあり 其石段をた
げり

八幡社 八幡社 膳所小幡あり 義仲并 巳女をたるとり ○五百四維漢

守子川 守子川 上のりる川といふもえり同をたるとり 首粟津の
森をたてしめりといふは 兼平の地と云ふなり

兼平塚 兼平塚 兼平が塚 兼平が塚と云ふなり 鬼貫

鳥居川村 鳥居川村 兼平ありたりへは 兼平の地と云ふなり 其

兼平寺 兼平寺の地と云ふなり 兼平寺の地と云ふなり

芭蕉翁 芭蕉翁の地と云ふなり 石山の奥石間の後園と云ふあり翁の記ありて
凡俗文選 兼平集と云ふなり

あつこの薬師 あつこの薬師 兼平三三建立此中の石佛ありしに 兼平の地と云ふなり
石山一よりわらわはせむありしやとて 兼平の地と云ふなり 貞徳

堂谷 兼平の地と云ふなり 兼平の地と云ふなり ○夢浮橋 兼平の地と云ふなり
兼平の地と云ふなり 兼平の地と云ふなり 兼平の地と云ふなり

栗津合戦

今井四郎兼平はつと
級を及んで敗卒
八十騎を幸ひし

義仲よりくま

あひ龍光

先鋒一系

四郎と退

くんと樹

是もも

仲討れ

ぬき

その歌

石田彦

日向

曰これ

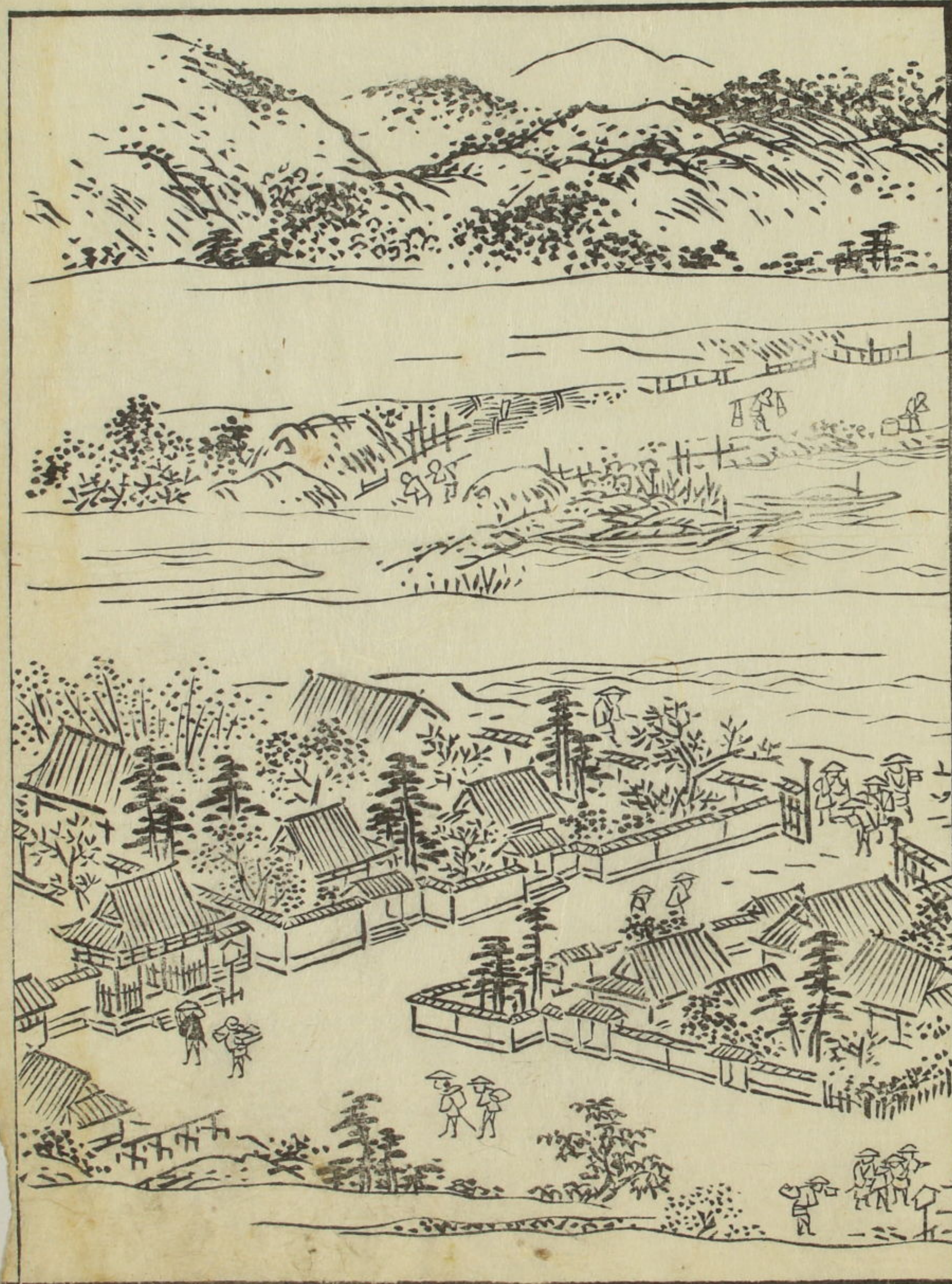
多東園



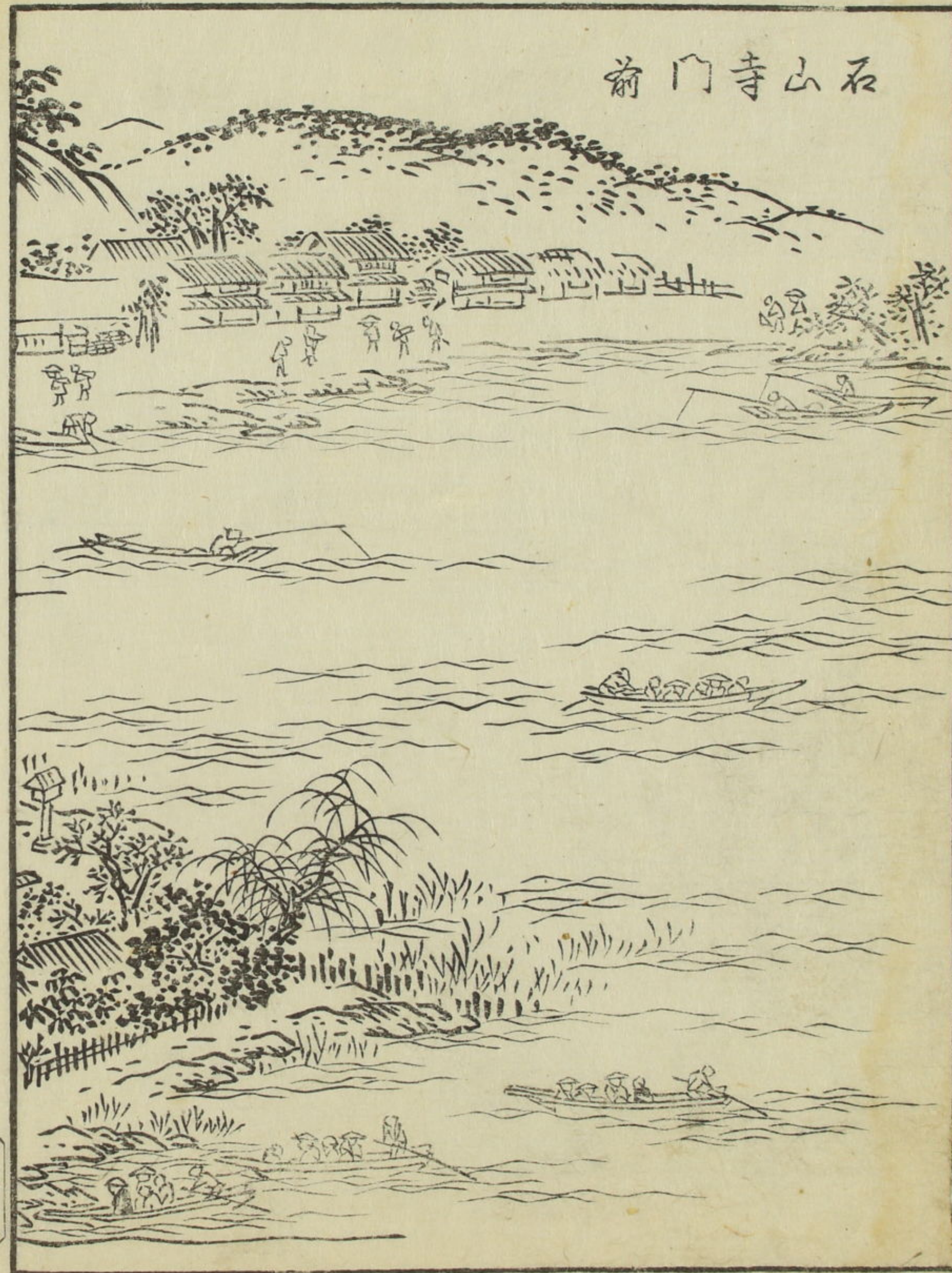
一の別者自
家より
よそ刀の
を
馬より
まふ
つぬ
て

平家物語





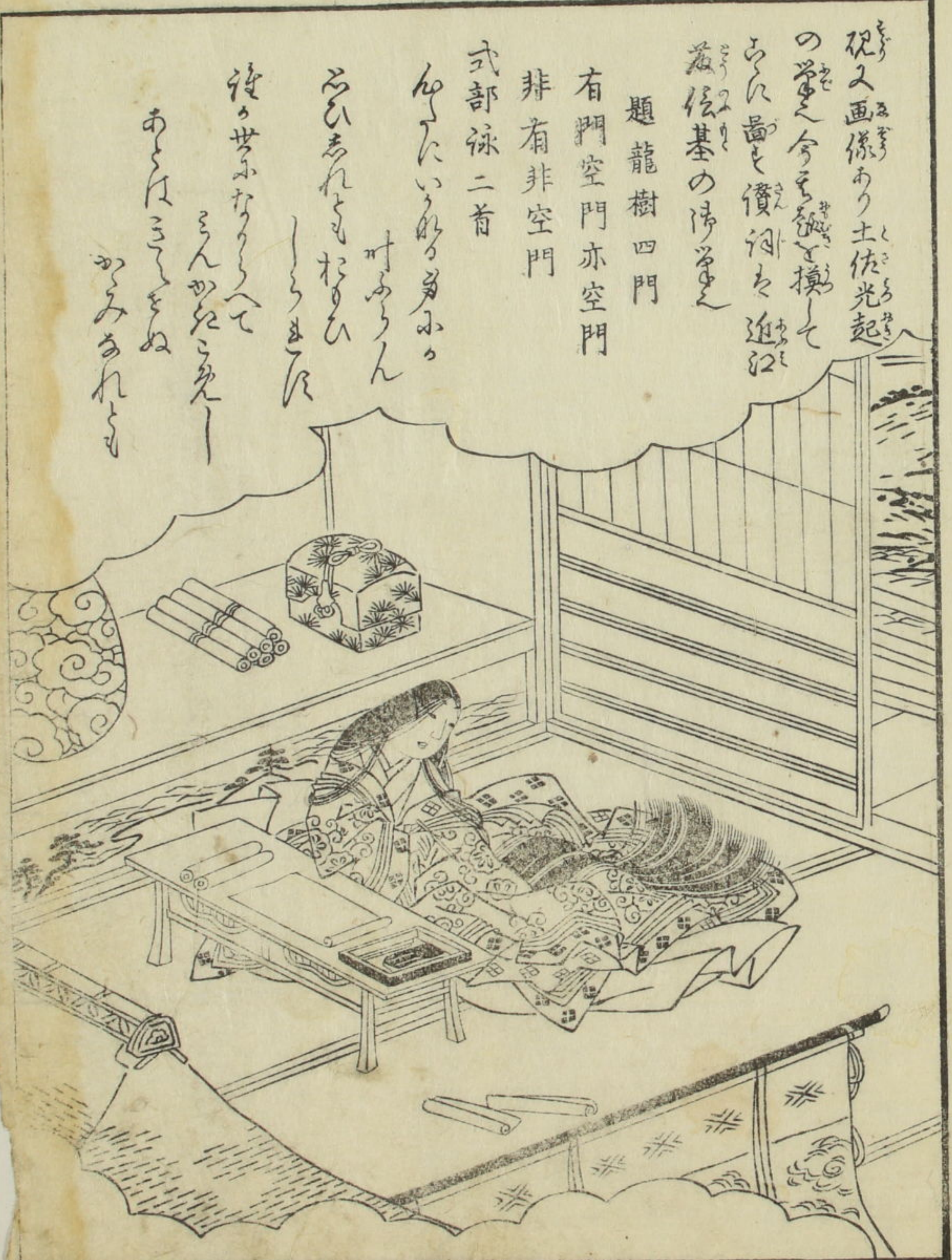
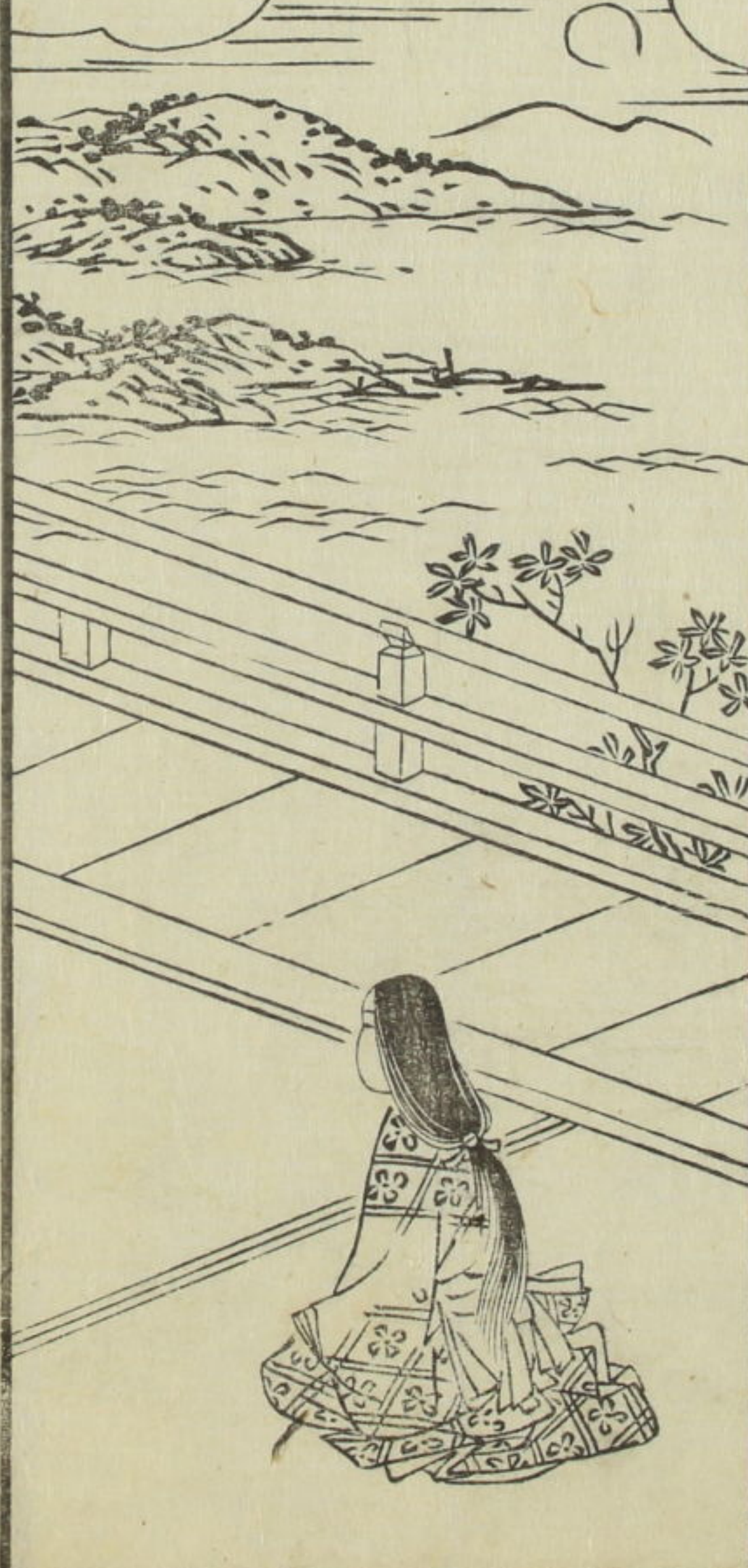
石山寺門前



紫女七論標題云

才德兼備 式部才を賞し又拙治の本よりつて本心の英徳ありんせり此れからこそ
 七事共具 又も名前の学者かう二より幼にして徹明三より看樂より妙なりはよも公の
 修撰年序 拙治の眼の肥る五より時代中業を修く文筆のゆる六より法園の名區を經
 文章無雙 歷と七より多る鄙の心う道と
 作者本意 此れがたり又加筆脚注ありとのほつとて他の拙治引て年記をあらと
 一部大事 拙治の一作たるマを編と
 正傳説誤 冷泉院のほつとて異説ありつと論と
 この拙治の治拾遺といお付が維とこまりあつともさむとあつとせつとつと

紫式部石の
 信と源氏物語
 又十余信あり
 り今本堂の中
 源氏の石といあり
 式部物語の



又又画儀あり土佐光起
 の字之今も御と撰とて
 あり画と價河と近江
 源氏基の抄字之
 題龍樹四門
 右門空門亦空門
 非有非空門
 式部詠二首
 心といふもの身ふ
 叶あらん
 心いあれともおひ
 けの世ふたつて
 らんかたえ
 あらけこそね
 かみあれと

